

No.110

# 新設図書館の紹介 高市立成羽中学校図書館

## 新図書館は三年目

平成十九年春、本校初の司書配置をいただき、その年の十一月に、耐震補強した新築校舎に入りました。新校舎と同じく、今年度で本校勤務三年目となる学校司書が、図書館をご紹介します。

全校生徒は一三八人・六クラス(平成二十一年度現在)です。ほぼ全員が顔見知りで、郷土愛の強い、落ち着いた生徒たちです。

本校の卒業生で、京セラ株式会社相談役の伊藤謙介氏からご寄付をいただいている現在は、年間の図書購入予算が市費と併せて約九十万円、蔵書は一万一千冊超です。

中央・昇降口の隣という、絶好の場所に位置するため、先生も生徒も交流する、にぎわう場所となりました。席数三十五のスペースは、早くも手狭です。

### 表示の工夫と展示で本が増えた？

書架は「一類く心の中をのぞく本」など、キャッチコピーをつけた大きな表示板で分類しました。「こんな本もあるのか」と気付いてもらえるように、視界のあらゆる場所に、教科や学校行事・話題に合わせた本を展示しています。書架の本を「発掘」するたびに、生徒たちは「CD ショップみたい」「また本が増えるよ!」と楽しそうに言い、リクエストも増えます。



相談や手続きで混み合うカウンター



なかまと思いいい思いに閲覧



「成中のなかがまがおススメする本」



ひとりになる場所も



「文化祭どうする?」昼休みに作戦会議

### メディアギャラリー

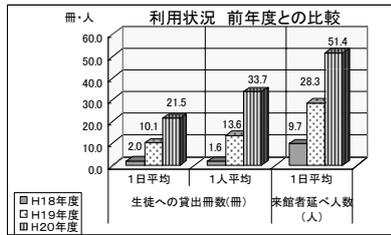
新校舎の特徴として、各階にメディアギャラリーと呼ぶ、図書館の分室のような場所があります。クラス前の広い廊下に、背中合わせの低書架と閲覧机・イスがあります。書架の片面に学級文庫、もう片面は図書委員が企画管理する、本の展示場です。図書委員は学期ごとにテーマを考え、表示に工夫を凝らして図書館の本を紹介します。主に朝読書で活用され、生徒目線の選書は先生方にも新鮮です。



メディアギャラリー

### 協力に感謝

先生方の協力は、大きな励みです。欠かさず季節の生花や果実を届けて、来館者を和ませる先生方がいらっしやいます。届けてくださった



図書委員による統計 (授業利用は含まない)

のが珍しい植物の時には、そばに図鑑を並べてクイズの題材にもさせていただきます。

職員室では、温かい情報交換があります。ブックトークや調べ学習の感想、「うちの生徒は図書館が大好き」などの声が、さらなる依頼を生み、広げてくださいます。

### 司書がいる学校図書館として

①力をつける助けに  
調べ学習では、市立図書館と県立図書館、学校図書館間の相互貸借にお世話になり、資料を用意します。

一つのテーマについて複数冊、きちんと書かれた資料を集めることで「情報を比べて選び取る力」の助けになるよう願います。本の調べ方や参考文献の表記方法については、事前説明の時間をいただき、易しくまとめたプリントをラミネート加工して閲覧机に常備し、啓発しています。

### ②レファレンスでより身近に

十分間休憩のわずかな時間にも多様な質問を受けます。教室移動のついでに立ち寄る生徒も多く「次の休憩時間までに」と約束して回答することもしばしばです。

### ③共に成長する図書館

毎日の学校生活を共にすること、中学生の成長と心の揺れ、新しい疑問が生まれる瞬間を感じる事ができます。学校司書として、この

環境に感謝しながら、先生方と生徒たちに精一杯心を寄せ、生活に添う資料で役立ちたいと精進しています。

臨時学校図書館司書 美旗知登世

## 図書館のディスプレイ⑤

### 大学図書館のディスプレイで何ができるか

中国学園図書館 菜崎直子

大学図書館というと、一般にどんなイメージをもたれるでしょうか。暗い・堅苦しい・入りにくい・専門書しかない、と言うところでしょうか。どうしたら図書館を利用してもらえるか悩みの多いところです。当館も、学生の足向く図書館になるよう日々考えています。

中国学園図書館は八年前に新築し、東西南側がガラス張りの構造です。で「暗い」というイメージはありません。堅苦しい・入りにくいというイメージを払拭するにはどうしたらよいか。そこで考えたのが、ひとつは特色のある蔵書構築（「絵本ミュージアム」構想）、そしてもうひとつが学生参加型図書館を目指す、ということでした。

#### 一、何を讀んだらよいのか

（ビギナーズコレクション）

大学に入ってどんな本を読んだら良いかわからない、という学生は、残念ながら多いのが現状です。そこで当館では、手始めにこんなものを読んでもたら、というものを学科別に展示しています。これは、学部・学科の先生方からの助言を頂いているものなのですが、専門的なものからハウツーものまで様々です。私たちにも学生がどのような図書が必要としているのかよくわかります。



「ビギナーズコレクション」

#### 二、学生の「顔」がみえる展示

（授業成果物の展示）

大学に二学部（現代生活学部・子ども学部）、短大に五学科（総合生活学科・保育学科・英語コミュニケーション）

ション学科・音楽科・情報ビジネス学科）二専攻科（音楽専攻・介護福祉専攻）があるお陰で、色々な分野の展示が出来ます。

始まりはグラフィックデザインの授業で作ったというミニ絵本の展示でした（総合生活学科）。何しろ初めてでおとなしめの展示でしたが、何人もの学生が手にとって見ている姿が見られるようになりました。食品サンプルを並べ、栄養成分検査が出来るとあるような展示をしてみました。ともあります（現代生活学部）。

初めのうちこそ話を打ちかけて協力して頂いていましたが、今では先生方の方から「こんな授業をしたのだけど展示させてもらえるか」とか、「作った物を図書館に寄贈します」と言って頂けるようになりました。

カウンター前の小さなスペースでしていた展示が、今では図書館に入っすぐの一番目立つ所に専用の掲示板と机を置いて、常に何かがある状態です。

#### 三、図書館を知ってもらおう！

展示やその他の図書館企画の催し物の写真を、随時展示用掲示板やガラス面に貼っています。四月には前年度のものをまとめて「図書館歳時記」として展示しています。そのとき学生の落書きコーナーを設けたと

ころ、「他学科がどんなことをしているかわかってよかった」とか「知っている人の活動があつて嬉しかった」という書き込みがありました。図書館と学生のみならず、学生同士をつなぐ役にも立っているのかも知れません。



「展示コーナー」

中国学園大学・中国短期大学は、地域の中にあつて地域と繋がった大を目指しています。図書館を一般に公開をしているのはその一環です。一般の方々が熱心に展示を見られているのを見ると、大学のしていることを外部に知って頂く一助となつていように思えます。

平成二十一年十二月現在、展示コーナーには学生の成果物としては介護演習をまとめた壁面展示（介護福祉専攻）と手作り紙芝居（保育学

科)、図書館からは図書館スタッフからのおすすりめ本と、学生と書店でブックハンティングしたときの写真を展示しています。そのほか、絵本の展示型配架や、季節毎の飾り付けも大学図書館としては頑張っていると思いますので、岡山市の西の端、庭瀬方面にいらつしやる機会がありましたら、いつでものぞきにきて下さい。

**池田家文庫子ども向け岡山後楽園  
発見ワークショップについて**

岡山大学附属図書館には、岡山藩藩主備前池田家より移管された藩政史料(古文書、絵図、和書、漢籍)が貴重資料として保管されています。これら岡山大学に移管された資料の総称を池田家文庫と呼んでいます。

これらの資料は全国の大学での研究、教育に限らず、一般の方々の研究や調査に役立てられています。ただ、どうしても歴史資料という性質上、子どもたちの興味を引きにくいものでもあります。そこで、岡山市内に在住している小中学生に、昔の岡山について知って欲しい、池田家文庫からそのきっかけがつかれないだろうか、という貴重資料の教育的利用の可能性の検討を開始しまし

た。既に池田家文庫内の絵図はその多くがデジタルデータ化されています。デジタル化の最大の利点は、絵図を拡大縮小したり、複製が簡単で本物と同じものに気軽に触ることができる点です。

このデジタル絵図を利用して、岡山大学教育学部と岡山大学附属図書館と共催で、夏と冬の年二回ワークショップを開催することとなりました。池田家文庫の中には後楽園の絵図も数点あります。その中でも、現在の後楽園に近い「御後園絵図(文久三年)」と実際の後楽園を見比べて、昔と現在の違いを発見してもらおうというのがワークショップの内容です。ワークショップの内容は、毎年教育学部の学生企画をコンペにかけ、学生たちの投票で決定しています。そのため、毎年内容は変化しています。



ワークショップ広報用チラシ

平成二十一年度(2009年)に実施したワークショップを振り返りながら、詳

しく見ていきたいと思えます。平成二十一年度は、夏は七月十一日(土)、冬は十二月五日(土)の二回実施しました。夏は参加者、同伴者を含めて七十名近くのご参加をいただきました。冬は参加者、同伴者を含めて六名とコンパクトな開催となりました。

両日ともに快晴に恵まれました。二十一年度は後楽園内の栄唱の間を借り、原資料のおよそ二倍の大きさに拡大した巨大複製絵図を広げた状態から始まります。絵図の上に子どもたちはあがり、学生が上演する昔の後楽園を紹介する紙芝居を見たり、紙芝居に出てきた場所が絵図上のどこにあるのかを探したりしました。



巨大複製絵図の上で

その後、いくつかのチームに分かれた子どもたちと学生は、夏は新緑が、冬は紅葉の美しい後楽園内へと出かけていきます。先ほど上

にあがって見た複製絵図の縮小版を手には、ラリーポイントを目指して園内を散策します。各チームによりラリーポイントは違っており、それぞれのポイントで学生からポイントの今と昔の説明を受けます。そこで、各ポイントの知識を深めてもらい、ポイントすべてを回った子どもたちは、最後に絵図の上で他のルートを回ったみんなに、自分たちの行ったポイントで印象に残ったことや、発見したことを発表してもらいます。冬は少人数での開催となりましたのでチーム分けはせず、夏の内容にプラスして江戸時代の職業について学生からクイズ形式の説明がありました。

どの回に参加された方からも、楽しかった、今まで知らなかった後楽園の事や歴史についていろいろと知ることができたなど、たくさんの好評をいただいております。

本ワークショップは来年度も継続して開催予定です。ぜひこれからもたくさん子どもたちに参加してもらい、岡山の歴史資料や昔の後楽園を知ってもらおうとともに、大学生と世代を超えて一緒に学習する場を大切にしていきたいと考えています。

(久磨記)



絵図を見ながら、昔との違い

### おおー感想文は

### こぼれかたのたのたのたのね

—夏休み図書館行事からふたつ—

浅口市立鴨方図書館

夏休み真っただ中の八月九日、鴨方図書館では「児童図書館研究会岡山有志の会」と共催で、児童文学作家で梅光学院大学教授でもある村中李衣さんを講師にお招きして、読書感想文書き方教室(?)「おおー感想文はこんなにかんたんだったのね」を開催しました。

当館では、夏休みに科学遊びや絵画教室など、小学生の宿題に結びつくような行事を行ってきましたが、毎年保護者からの要望が多いのが自由研究と読書感想文。図書館としても、感想文のせいで読書嫌が増えはたまりませんから、何とかした

いとは思っていません。そんな時耳にしたのが「村中さんの感想文は面白いらしいよ」という話。

「準備するものは、感想文を書こうと思う本と筆記用具、糊とはさみです。本は事前に読んでもらっておいってください。図書館ではA3の白紙を人数分準備してください。」事前準備を尋ねた職員に村中さんから返ってきた答えはこれだけ。糊?はさみ?職員もびっくりしましたが参加者も驚いたことでしょう。「ぜひ感想文教室を」という切実な言葉どおり、会場に集まった募集定員いっぱい(の三十五組の親子と一般参加者、計百名の顔にはどこか戸惑い)。けれど、それも会が始まるまでのこと。



「会場いっぱいの参加者」

まず二人一組になって、じゃんけんでインタビュする人とされる人を決めます。インタビュする人は、

村中さんから渡されたワークシートに沿って「今年の夏休みはどんな夏休みでしたか」「感想文に選んだ本は何ですか」「読むのにどれくらい時間がかかりましたか」「それはなぜですか」…、次々と質問をし、相手の答えを白紙に書きとめていきます。「一学期の成績が悪かったから、算数ドリルばかりしてた夏休みでした」「本のタイトルは『○○』です」「三日で読みました」「面白かったか」「一気に入りました」…。その答えをひとつずつ切り離し相手に渡します。渡された方が、それを自分のシートに貼っていくと、「僕の今年の夏休みは算数三昧のつらい夏休みだった。そんな夏休みに読んだ本が『○○』」。面白かったから三日間で一気に読んだよ。…」という風に感想文が書きあがっていく仕組みです。こうして、役割を交代しながら、お互いに書き進めていきました。

一から自分で考えながら書くよりも、誰かに聞いてもらいながら答える方が、言葉を取り繕う必要もなく、ポイントもまとめやすいようで、二時間という時間があっという間に過ぎていきました。

けれども、感想文は感想文。にこやかに話しながら書き進めている親子もいれば、せつかく子どもが書いた文章を「違うでしょ」と消してし

まっけてんか始める親子の姿も。村中さんの「感想文は特別と思うから大変なんです。毎日の生活の一部に読書があり感想文がある。心に残る本は感想文を書いても書かなくても心に残る。それよりも、あの夏休みはあんな風にながら親子で感想文を書いたよね、そんな夏の思い出が残ればいいんじゃないですか。」という言葉がとても印象的でした。

もうひとつ、自由研究お助け事業(?)として開いたのが『私たちの浅口市』を知ろう」という展示です。市内の農協、漁協、商工会、市役所の産業振興課などの協力を得て、小学四年生の社会科の副読本の中から産業に関する部分を、資料や写真を添えたパネルと現物で分かりやすく展示しました。

この事業の特徴は、「図書館で郷土を知ろう」というテーマで、井笠地域三市二町の図書館が足並みをそろえて行ったこと。浅口市は産業でしたが、井原市は地元の神社の祭りと星について、笠岡市は笠岡諸島の「島弁」やカブトガニについてなど、各館特徴のあるものになりました。

井笠地域には大きな公立図書館はありませんが、その分、お互い情報交換をしながら日々の業務をこなしています。今回も、「単館で行うよ

り励みにもなるし、マスコミなどへのPR効果もあるから一緒にやらないか」と声をかけたらすぐに話がまとまりました。

後日開いた反省会では、「以外に子どもより大人の反応がよかった」「自分たちが勉強になった」などの声にまじって、「来年は何にする？」という声が…。

村中さんの講座もこうした仲間からの情報によって実現しました。

これからも、いろいろな人とのつながりを大切にしながら、「図書館って面白いよね。結構役に立つよね」と思っていただけ情報を発信していきたいと思います。



「各館の展示は大人にも大人気!!」



「ストロー発祥は浅口市!」

☆個人会員の紹介☆

岡山市立中央図書館

梅田 雅也

「ラジオで紹介されていた本が面白そうだから」「この作者のシリーズものをひとつずつ順番に」「この本が面白いつつ順番に」「この本が面白いつつ順番に」

「自分も読んでみたいから送ってください、と図書館に電話がかかってきます。希望されたものが図書館にあれば用意をして、なければインターネットで全国の施設の所蔵を調べて取り寄せて、利用者に向けて送ります。こうして毎日のように送るのは、録音図書。

私は今、岡山市立中央図書館二階の事務室で、整理業務と視覚障害者へのサービスをしています。一日のほとんどを事務室で過ごし、電話やメールなどの向こう側にいる利用者資料を提供しています。

リクエストは電話やメールだけでなく、ご家族からの葉書や、弱視の方からの大きな文字の手紙でもきます。点字の手紙が届いて、触っても読めない手紙を基本の五十音一覧を見ながら一字ずつ目で解読することもあります。利用者も様々で、全く見えない人や弱視の人、中途失明の人、点字が読める人読めない人、点字を読めないけれど書ける人、視覚だけでなく手足も不自由な人、パソコンを自在に使える人、盲導犬と一緒にどこまでも行ける人。郵送方法もそれぞれに合わせて、袋にまとめて入れて送ったり、ポストで返送できるようにしたり、不自由な手でも扱いやすい袋にしたり。

このように色々な方がおられますが、図書館を利用される目的は障害のない利用者と同じです。読みたい本が読みたい、知りたいことが知りたい、そんなごくあたりまえのことを、障害を持つ利用者も求められています。

岡山市では、昭和五十二年に発足した「岡山市立図書館朗読奉仕の会」というボランティアグループに協力していただいて、録音図書の製作や対面朗読を行っています。録音図書は従来のカセットテープだけでなく、デジタルの録音図書（デジタル図書）も製作するようになりました。

テープ図書の製作は機材等の関係でだんだん難しくなりそうです。全国の点字図書館等でもカセットテープでの製作や提供を中止し、デジタル図書での提供のみとしている施設もあります。しかし、カセットテープしか使えない利用者もまだたくさんおられます。デジタル図書を聴くための機械の購入をためらっている方や、もう年だからわざわざ新しい機械の操作を覚えたくないという方もいらっしゃると思います。そういった方々のために、可能な限りカセットテープでの提供も続けていきたいと考えています。

もちろん、これからの主流はデジタルの録音図書です。多くの利用者是一度デジタル図書を利用すると、もうカセットテープは面倒で使えないと言われます。テープよりずっと簡単に読みたい箇所を呼び出せて、返却時の巻き戻しも不要、一冊の本がCD一枚に全て収まるデジタル図書は、まさに本を読むような感じの本を聴くことができます。

ここまで読まれて、岡山市立図書館の障害者サービスは充実していると思われた方がいらっしゃるかもしれませんが、しかし、私はそうは思っていません。もし自分の目が見えなくなったら、これらのサービスが本当に充実していると思えるで

しょうか。障害のない人へのサービスはあんなに力が入っているのに、自分たちへのサービスは予算も人も満足に付かないで、どうしてこんなに不十分なままなのだと、きつと思ってしまう。

けれども、今は不十分なサービスだからこそ、これからできることがたくさんあり、それらに取り組みこ

とで図書館がより必要とされる存在になるのではないだろうか。それは岡山市だけでなく、全国の図書館についても同様です。点字図書館等の施設はほとんどが各県に一つしかなく、また、その規模やサービス内容は施設によって大きな差があるために、充分に利用できない方がおられると思います。各図書館が障害者サービスを行ない、それぞれの図書館が協力をし、点字図書館等の施設とも協力できれば、障害のある人ももっと身近に本や情報に触れて、毎日の生活をより豊かにすることができ

るようになるのでは。できることも、やらないといけないことも、たくさんあります。学ばなければならぬこともたくさんあります。利用者から様々な希望を聞くたびに、そのことを強く感じます。でもそれは特別なことではなく、これまで図書館が積み重ねてきたことと同じもので、あたりまえのこと

すし、特定の職員だけが担当し、考えるものでもありません。「聴きたい」ではなくて「読みたい」と電話で言われたように、障害のある人が障害のない人と同じように本を求め、図書館がそれに応える。そのことがこうしてわざわざ書くまでもない、あたりまえのことになるようにと思いつながら、今日も利用者に向けて録音図書を送り出します。

\* 次回の個人紹介は岡山県立図書館の隈元 恒さんです。

「一日でも図書館フェスティバル」のご案内  
（第10回全太郎フェス）  
ONZONZONJUGO 報告

勝央図書館 家元 瞳

九月十三日。初秋のさわやかな青空が広がる朝。皆の気合いが入る中、勝央図書館、勝央美術文学館、勝央文化ホールと広場に分け、フェスティバルがスタートしました。

図書館ではストーリーテリング、民話や紙芝居、外国の仲間による英語の大型絵本の読み聞かせにより世代間交流や国際交流も楽しめ、県立図書館利用者登録コーナーも設置されました。

美術文学館では絵本の原画展「絵本岡山のむかしばなし」を無料で公

開しました。

文化ホールでは、岡山県読書推進表彰式とステージイベントを行い、立石憲利先生の民話の語り、山猫合奏団によるチェロとピアノと語りのコンサート「どんぐりと山猫」、津山高専ロボコンチームによるロボットの紹介が行われました。

広場テント村では食べものテントと体験型テントの出店でにぎわい、体験コーナーではお手玉、エコクラフトなどの工作やバルーンアート、津山高専ロボコンチームによる小ロボットを動かす体験コーナーを設置。こどもも大人も楽しく真剣な表情で取り組んでいました。また、NHK地デジわくわく広場同時開催により地デジ放送中継車やミニゲームコーナー等が加わり、賑わいをみせ、ブックリサイクルコーナーは大好評でした。

「図書館や地域の力を活用してこどもの読書への興味を起すきっかけづくりができないだろうか」からはじまった勝央町でのフェスティバルは、県立図書館の皆さんをはじめ多くの地域ボランティアの方々、町内小学校の先生方をはじめ、読書大使として参加してくれた小学生の皆さん、各関係の方々と、本当に多くの皆さんのご協力のもと「二日こども図書館フェスティバル」を成功に導

くことができましたを大変感謝しています。

感想にも「来年もしてほしい」「本がもっと好きになった」「大きくなった子が、読み聞かせを喜んで聞いていたから驚き、うれしかった」「司書になりたい」等という声をいただきました。これも皆さんのご協力があればこそ嬉しい言葉でした。この場をお借りしてご協力いただいたすべての関係者の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。



「広場 テント村にて」

平成二十二年三月二十日  
〒七〇〇一〇八二三  
岡山市北区丸の内二一六―三〇  
岡山県立図書館  
メディア・協力課 図書館協力班内  
岡山県図書館協会  
会長 西山 猛  
(〇八六) 二二四―二二六九